

「阿部一族」の悲劇がその察を明らかにし始めるのは、殉死の許可を得られぬままに阿部弥一右衛門が生きて従来どおり「華公を続けることを決意した時点だといえるだろう。これは「阿部一族」事件の事実上の発端であり、物語の最初の山場とでもいえるべき所である。その時の弥一右衛門の胸中は独白という形で小説の中に明らかにされている。この独白は「阿部一族」の論者が殆ど必ず取り上げるといつてもよい文章で、その関心は概ね独白後半の一だが己は己だ。好いわ。武士は妾とは違ふ。主の氣に入らぬからと云つて、立場が無くなる筈は無い。一という部分に集中し、しかもこれを正の方向に評価しようとする読みが大半であるといつてよいだろう。その内の代表的な論者には(1)「一すじに自己の信条を貫くこととするその決意は、高く道徳的である」として、この独白に高い評価を与える若上順一氏が先ずあげられるだろう。道腰を切らずに生き続ける決心をした弥一右衛門を(2)「自己の意志の主体性を堅持した」とするのは長谷川泉氏である。氏はまた同じ論文で「人間の主体的意志の純粋さ」とも書いている。尾形仿氏はこの独白部分に(3)「絶対的な封建領土の権威に抗する、それと対等な人間関係に立つてのはげしい個我の主張」を説き、(4)「絶對的」とも書いている。これらは程度差はあるが、いずれも弥一右衛門のこの独白に積極的な倫理的意味を認めたものと言つてよいだろう。

これに対する読みにはどのようなものがあるだろうか。弥一右衛門の性格に関して稲垣選郎氏は(5)「鶴外がほどこしたような性格を、しんじつ阿部弥一右衛門がもつていたとすれば」と書いているが、これは独白部分に負の倫理的要素を読みとる姿勢につながる指摘である。藤本千鶴子氏は論文(6)「一意地について」の中で、「弥一右衛門が、世間のいいなりになつて死を急いだのは、俗流の非難を越えるような確固とした理念を待たなかつたからではないだろうか、という推察もできるのである。一といつて負の読みが可能であること」を言っている。これは先の稲垣氏の読みの方向をより明確に示したものであると考えられる。

このように弥一右衛門の独白部分には、互いに全く逆方向に向かう二種類の読みが存在する。この二方向のうち独白部分自体は一体どちらの方向をさしているのであろうか。本稿は問題の独白部分を負の方向で読もうとする立場に立ち、その読みを可能なかぎり小説本文に拠りながら追究する試みである。

(一)

先ず独白部分を引用する。(独白ではないが、考察の都合上必要な文言を加え、それは括弧に入れて示した。)

(彌一右衛門はつくづく考へて決心した)自分の身分で、此場合に殉死せず生き残つて、家中のものに願を合せてあると云ふことは、百人が百人所詮出来ぬ事と思ふだらう。犬死と知つて切腹するか、浪人して熊本を去るかの外、爲方があるまい。だが己は己だ。好いわ。武士は妾とは違ふ。主の氣に入らぬからと云つて、立場が無くなる筈は無い。(かう思つて一日一日と例の如くに勤めてゐた。)

この独白は「爲方があるまい」までの前半とそれ以下の後半とに分けることが出来る。前半では周囲の態度に関する弥一右衛門の推測が語られた後、以後自身の取るべき行動が選択肢の形式で二つ挙げられている。後半では前半での二つの選択肢を取らぬ理由が先ず語られ、続いて「一日一日と例の如くに勤めてゐた」という文言が続く。今仮に前半に挙げられた選択肢を順に第一の選択肢・第二の選択肢とし、後半に示される行動を第三の選択肢と呼ぶ。弥一右衛門は第三の選択肢を採つた。これが第一の選択肢・第二の選択肢に

も増して困難な運であつたことは、独白の前半に「自分の身分で、此場合に殉死せずに生き残つて、家中のものに顔を合せてゐると云ふことは、百人が百人所詮出来ぬ事と思ふだらう。」と述べられておられるとおりである。所でこの困難は作者の描く武家社会の通念とどれ程一致するものであらうか。

死を目前にして「病苦にも増したせつない思をしながら」殉死を許可しなければならぬ志利は「若し自分が殉死を許さずに置いて、彼等が生きながらへてゐたら、どうであらうか。家中一同は彼等を死ぬべき時に死なぬものとし、恩知らずとし、卑怯者として共に擯せぬであらう」と考えるのであり、内藤長十郎は「若し自分が殉死せずにゐたら、恐ろしい屈辱を受けるに違ひないと心配してゐた。」これらの文言は先の弥一右衛門の推測を登場人物それぞれの立場から言いなおしたもので、「共に擯せぬ」といい「恐ろしい屈辱を受ける」というのも「家中のものに顔を合せてゐると云ふことは、百人が百人所詮出来ぬ」というのと同趣旨である。つまり、弥一右衛門の判断は作者描くところの武家社会の通念を十分理解したもので、第三の選択肢の困難は仮定のものではない。冒頭の「彌一右衛門はつくづく考へて決心した」が周到な措辞であることをここに改めて確認することができよう。それでは何故弥一右衛門はその困難な運を選択したのであらうか。この疑問を解決するには順序として第一の選択肢及び第二の選択肢を吟味する必要がある。

先ず第一の選択肢「犬死と知つて切腹する」を吟味してみよう。弥一右衛門は何故この選択肢を探らなかつたのであらうか。しかしこれにはすでに作者によつてその理由が明らかにされている。即ち「(將)死天の山三途の川のお供をするにも是非殿様のお許を得なくてはならない。その許もないのに死んでは、それは犬死である。武士は名聞が大切だから、犬死はしない。」と強い調子で書かれているのがそれである。この文言に續いて挙げられたのが内藤長十郎の例である。殿様から殉死の許可を得ようとして心を砕くその姿はこの文言の真実を目のあたりに描きだすかのような効果がある。そして何よりもこの文言の真実はそれ自身が不可欠の伏線である後の弥一右衛門殉死願出の場面を読むことによつて十二分に証されるといわなければならない。弥一右衛門独白中の「犬死」という語は先の「武士は名聞が大切だから、犬死はしない。」という文言に応ずるものであることは言うまでもない。ここに弥一右衛門が遺腹を断絶しえなかつた理由を読むことができよう。

しかし、これには以下のような不明瞭な点がある。即ち小説の後の方で「お許が無うて遺腹は切らぬ着が無い。」という「噂」が出る。これを取るに足りぬ「噂」として黙殺することが弥一右衛門に出来なかつたのは何故だらうか。思つてこの「噂」にも一分の許が含まれていたのであり、それが弥一右衛門を動かしたのであらう。後に述べようが、その場合でさえも「お許が無くても遺腹は可能だ」という弥一右衛門を含む武家社会の共通の理解がないところにあの「噂」は生まれ得ぬのではないだらうか。もしそうだとすればこれは明らかに「その許もないのに死んでは、それは犬死である。武士は名聞が大切だから、犬死はしない。」という前提に反する。そしてその後弥一右衛門が敢行した遺腹によつてこの前提は無意味なものとなつたといつていいだらう。しかも「上では彌一右衛門の遺骸を靈屋の側に葬ることを許したのであるから、跡目相續の上にも強ひて境界を立てずに置いて、殉死者一同と同じ扱をして好かつたのである。」、或いは「故殿様のお許を得ずに切腹しても、殉死者の列に加へられ」と後に出る文言は、弥一右衛門の遺腹が他の許可を得た殉死と同じ扱いを受けたこと、即ちそれが「犬死」ではなかつたことをいうものではないだらうか。これは先前提を許可を与える側から否定したのと同じことである。また作者は別の所で「直遇を得た君臣の間に默契があつて、お許はなくてもお許があつたのと変らぬのである。」とお許のない殉死で犬死にならぬ場合の条件を書いているが、小説の本文を見るかぎりでは弥一右衛門の場合がこの場合に当たるとは考えられない。「その許もないのに死んでは、それは犬死である。武士は名聞が大切だから、犬死はしない。」という前提は許可を与えるものと許可を受けるものとの双方から否定されたと考えらるべきであらう。光尚の側から見て「その許もないのに死んでは、それは犬死である。武士は名聞が大切だから、犬死はしない。」という前提を無視したのは何故か、それを明らかにする材料は小説の本文には存在しないようである。しかし、許可を受けるもの側に

ついでには次のように考えることが出来る。

あの「噂」が出る前と後とでは追腹の意味が違ってくることに注意しておかなければならない。弥一右衛門の「噂」への反応は「併し、此彌一右衛門を堅から見ても横から見ても、命の惜しい男とは、どうして見えようぞ。」というものである。「噂」を「命を惜しむ男」という侮辱と理解したのである。ここから弥一右衛門の追腹は殿様のお供を願う哀情からではなく「命を惜しむ男」という侮辱に堪えられなかつたからだと判断できる。弥一右衛門の死は殿様の許可を得ていないので「犬死」であるには違いないが、それを真知した上でなおかつその「犬死」を敢行しなければならぬ理由が弥一右衛門にはあつた。そしてそれは「命を惜しまぬ」という誇りを汚す「噂」に堪えられぬからというのであつた。既に明らかなるように弥一右衛門の追腹は「その許もないのに死んで、それは犬死である。武士は名聞が大切だから、犬死はしない。」という前提とは殆ど無関係に行なわれたいものだと考えてよいだろう。弥一右衛門を理解するの鍵の一つがここにある。弥一右衛門が「犬死」と知つて切腹する「ことと受けた侮辱に堪えられずする追腹との間にある違いを考えてみよう。前者は武家社会の慣習をいうのに対して後者は全く個人的なレベルの感情に関わるという点が大きな違いとして先ず考えられる。これは弥一右衛門が「犬死」と知つて切腹するか、浪人して兼本を去るかの外、為方があるまい」という至極全うな判断を出し得る人間であつたにもかかわらず、その判断にしたがつて「犬死」と知つて切腹する「こと」が出来なかつた理由を考える時の大きなヒントである。

三好行雄氏が「弥一右衛門もまた彼なりに、武士道のモラルを生きたのである。」と指摘するように「命を惜しむ男」という侮辱に堪えられぬという反応の仕方は確かにその時代の考え方を踏み越えるものではなかつただろう。しかしながら、ここで作者が問題にしているのは、ある考えが時代の考えを批判し得ているかそれを踏み越えているか、或いはそれが近代のものであるか封建的なものであるかということではなく、その考えに自己がそれを生きるに値する真実の内容を内側から感じ得るかどうかということであつた。作者は内藤長十郎の逸話を語る場合にもこのことを明確に描いている。

作者は内藤長十郎の逸話を語る際に「細かに此男の心中に立ち入つて見ると」といつてこの若者の「心配」や「弱み」を描いて行くが、最後に「どうぞ殿様に殉死を許して戴かう」と云ふ願望は、何物の障礙をも被らずに此男の意志の全幅を傾けてゐたのである。「と書くのを忘れていない。またこの前には「その報謝と賠償との道は殉死の外無いと牢く信ずるようになった。」とも書いている。この内面の強い促しを強調するような文章を何故作者は繰り返すか、ねばならなかつたのだろうか。それは一人に訴へがつて死の方向へ進んで行くやうな心持が、殆んど同じ強さに存在してゐた。」と書いたり、またややこの若者の「心配」や「弱み」に筆を費やし過ぎたので、そこから起こるかも知れぬ読者の誤解をおそれたためだつたのではないだろうか。すなわち作者はこの内藤長十郎の殉死が強い内面的な促しに振るものであつたことを確認しておきたかつたのである。この逸話の後半は殉死当日の内藤長十郎を描くが、その静かな姿に託して作者が言いたかつたことは何だつたのだろうか。内藤長十郎の些かも取り乱すことのない心境を描く後半は殉死の根底的な動機が本人の外にはなく、内からの強い促しによるものであつたということをも具体的に語るものと記述することが出来るのではないだろうか。これらは人の行為を観察するときの「鵠外の目を感ぜさせる書き方で、後の弥一右衛門の場合を考えるときに参考になるだろう。」さて「犬死」と知つて切腹する「こと」を要求するのは武家社会の慣習であるが、「意地ばかりで奉公して行く」とされる弥一右衛門がその武家社会の慣習に自己の内面的な真実を感じていたとは考えにくい。弥一右衛門が第一の選択肢をとらなかつたのは、それがこの男の内面に触れる力を持たず、弥一右衛門はそこに自己を内側から突き動かす力を見ることが出来なかつたからではないのかと考えられる。一方、「命を惜しむ男」という侮辱はそれが弥一右衛門の内側に根を植へた倫理観に触れるものであつた故に、直に弥一右衛門の心の奥深いところまで達し、この男を強く揺さぶることになつたのである。以上から弥一右衛門が独白の中で追腹を切ることを選択肢の一つにあげながらそれに従わなかつたのは、そこに弥一右衛門自身が内的な意味を見付けることが出来なかつたからであると考えることが出来るだろう。

次に「浪人して熊本を去る」という第二の選択肢について考えてみたい。亦「右衛門は何故「浪人して熊本を去る」らなかつたのであろうか。「浪人して熊本を去る」先例として参考になる話が小説の後の方にあげられている。それは竹内数馬の先祖に竹内吉兵衛というものがあつて、それが「加藤清正に千石で召し出されてゐたが、主君と物争をして白晝に熊本城下を立ち退いた」という挿話である。この例からすると、「熊本を去る」こと自体は亦「右衛門」にとつても不可能ではなかつたのではないかという推測も成り立ちそうである。亦「右衛門」がこの選択肢を採らなかつた理由がますます分りにくくなるともいえよう。

所でこの問題を考える手掛かりになりそうな文言を独白部分に見いだすことは出来ぬものであろうか。それについては又中「立場が無くなる」とある句は見過ごしがたい。この一句中特に注意したいのは「立場」という語である。この語は「利己主義ばかりで推して行けば、自分の立場がなくなる」といふことは知つてゐる。「(岩波第三回外全集第七巻)と「蛇」の中でも使われている。この用例でこの語は「思想的な立脚点」ひいては「身の置場」という意味で使われていると考えられるが、「阿部一族」の用例の意味もこれに近い。そしてこれを元の「武士は妾とは違ふ。主の氣に入らぬから」といつて、「立場が無くなる」等はない」といふ文脈に戻してこれを眺むならばそれは更に具体的に狭められた意味を指していると考えられる。

「武士は妾とは違ふ」といふ文言によつて示される対比は勿論(7)「『武士』という身分に對する自敬の意識」から出て、武士の優越を言うものである。このように対比によつて一方の優越を示そうとする場合には、そもそも対比が成立する条件として、この二者には共通点が存在しなければならぬ。この場合あらためて言うまでもなくその共通点とは敵様に仕えるという「武士」としての、或いは「妾」としての「立場」である。そして、そのそれぞれの「立場」が「主の氣に入らぬ」という事実の影響を受けるか受けぬかという点で両者には相違があるというのである。「妾」は「主」の寵愛を失ふと同時にその存在の本来の意味を失ふのに対して、「武士」はそうではない。前者についてはここに多くの言葉を費やす必要はないと思うが、これは要するに「妾」としての「仕事」を失うのである。それに対して、「武士」はどうか。亦「右衛門」の解釈によれば、「妾」の場合に当てはまつたこの論理は「武士」たる自分には当てはまらぬ、今迄通り御奉公して仰けるのだというのである。ここから「立場」といふ言葉は「仕事・職」といふ極めて世俗的なものを意味し、「立場が無くなる」は、「失職する」といふ意味に理解するのが適當なのではないだろうか。以上の読みは亦「右衛門」の心情を理解するのに通俗的な解釈を以てする方向に私達を誘うが、これに従えば亦「右衛門」がここで恐れた最終的なものは、たとえば「武士の面目」などという精神的信念的なものが汚される屈辱ではなく、「失職」といふ極めて現実的な事態であつたことになる。そしてこの読みの確実性を思わせるのが、藤本千鶴子氏の論文(8)「歴史上の『阿部一族』事件」にある「殉死者にとつて、忠利の恩とは、父祖浪人の辛酸をなめているところを志利に召し出され、一族郎等の命をつなぐことができなかつたことであり」といふ文言である。これは他でもない「阿部一族」が浪人の身から取り立てられたことを恩としてそれが殉死の理由となりうる時代の話であつたことを語りとうとするものである。仕官することがそれほど大きな主君の恩と見做されるという背景には、一度浪人してしまえば再び仕官することが非常に困難な時代であつたという時代の状況が想像される。この再仕官困難の予測こそは亦「右衛門」が「浪人の辛酸」を予想して「浪人して熊本を去る」といふ選択肢を考えながらそれを行動に移し得なかつた一原因ではなかつたのではなからうか。

(9)「言今以後、國人之外、不可交置他国者事。」という一条をもつ武家諸法度が定められたのは、元和元年であつた。これは「阿部一族」の時代には既に削除された一条に属しているが、浪人の再仕官の現実には全く影響を持つていなかつたのであろうか。以後の考究の課題としたい。仮に武家諸法度のこの一条に従つたと亦「右衛門」の他国での再仕官は殆ど絶望的であつた。竹内吉兵衛の例は既に過去に属していたのであろうか。

或いは人はこの解釈を弥一右衛門にある打算を見ることに熱心でありすぎると批判するかもしれない。成程この解釈に従つて描かれる姿はあの「たつた今でも死んで好いのなら死んで見せると思ふので、昂然と項を反らして詰所へ出て、昂然と項を反らして詰所から引いてゐた。」という強い表現で描かれる精神の力の勝つた弥一右衛門という人物の姿とは大いに異なるというべきであらう。さて本文にこのあたり事情をもう少し明らかにする文章はないものであらうか。以下その例となりそうな文言を幾つか挙げてみよう。ここに挙げ得る文言は例えば次のようなものである。すなわち「夙くから恩利の側近く仕へて、千石石余の身分になつてゐる。一、或いは「子供五人の内三人まで軍功によつて新知二百石づつを買つた。一、また「市太夫も五太夫も島原の軍功で新知二百石を買つて別家してゐる」等の文章である。他に「己は島原で持場が語つて、知行も貰はずにある」という文章も挙げられるであらう。これらはみな弥一右衛門とその息子たちの財産に言及する文言である。この他にも財産に言及する場合は少なくない。先の「たつた今でも死んで好いのなら死んで見せると思ふので」という武士の面目を強調する一面と共に、或いは言及の回数から言えば、より多くの場で財産が意識されているといふべきであらう。中でも特にここに挙げておきたいのは、例の津崎五助の殉死を語る箇所で家老の言葉として紹介される「外の方々は高祿を賜はつて、榮耀をしたのに、そちは殿様のお犬養ではないか。」といふ文言である。ここでは「高祿を賜はつて、榮耀をした」ことが殉死者の条件として言及されている。小説世界を支配する価値観の一つをこれほど明確に述べている言葉は他にない。これらの文言が繰り返して行なうこと、すなわち財産への言及は弥一右衛門を含めてその他の登場人物の財産への強い関心を確かに示していると理解される。

また当時の一男以下の状態を考えるなら、市太夫及び五太夫が獲得した立場は誠に手放しがたいものであつたと推測される。或いは、これらを挙げて「武士の勲を知行で表現するのだ」と人はいふかもしれない。しかし、知行で表現される武士の勲とは何であらうか。武士の勲をも表現し得る知行というものは何であらうか。武士の勲が知行を以て表現され得るとする武士の意識とは何であらうか。

「浪人して熊本を去る他に、現在己のとるべき道はあるまい。しかし、浪人をして熊本を去るとなると今手にしているものを何もかも失ふねばならない。今まで築き上げて来た全てを失ふことは流石に辛いことではあるが、しかし他の殿様に仕えて再び手にし得るものであるなら、それも一時の不遇として恐ぶことも出来よう。今の時代にひと度浪人に身を随してしまえば、果たして再び浮かぶ瀬があるものか。浪人して舐めるであらう辛酸を思へば非難がましい目はあるが、今このまま殉死をせず勤め続けるほうがよい。武士は妾とは違ふ。主の気に入らぬからといつて己が身の置き所を奪われるようなことはあるまい。御奉公は御奉公で主の好悪とは無関係である。今までどおり精励啓動しておれば誰も文句を言ふものはあるまい。」

先の読みに従つて弥一右衛門の心理を拡大してみれば、こんな独白にもなるうか。以上見てきた通り、第一の選択肢はそこに内面的な実行の動機が欠けていた為に、第二の選択肢は現実的な判断の前に無謀と見えた為に、それぞれ弥一右衛門に実行の困難を思わせるものであつた。これらに対して第三の選択肢には弥一右衛門が従う特別の理由が存在したのであらうか。次にそれを検討してみよう。

## ( 二 )

以上考えてきた所から弥一右衛門が最初に出した二つの選択肢はそれを実行に移すにはそれぞれ何か欠けていたので、採られなかつたのだといえよう。さて次に問題となるのは、先の独白部分の前半では「自分の身分で、此場合に殉死せずに生き残つて、家中のものに顔を合せてゐると云ふことは、百人が百人所詮出来ぬ事と思ふだらう。」という形で

明らかにされてゆく第三の選択肢である。後半に「かう思つて一日一日と例の如くに勤めて来た」とあるように弥一右衛門はこの選択肢に従つた。

それにして、一自分の身分で、此場合に殉死せずに生き残つて、家中のものに顔を合せてあると云ふことは、百人が百人所詮出来ぬ事と思ふだらう。」という殆ど決定的な語調で披露される自身の判断を無視し、何故弥一右衛門は更に実行困難な第三の選択肢を採つたのか。前二者を退けて後者を採つたのには大きな理由が存在しなければならない。

この第三の選択に従つて行動した場合の悲劇的な結果を予測できないほど弥一右衛門が愚かであつたとは誰も考えることが出来ない。作者が明らかにするように人にすぐれた明察と判断力とを備える弥一右衛門が何故このようなおそらくは本人自身も無謀だと考えたであろう行動をとつたのか。物語は一族滅亡で終熄するが、これが弥一右衛門を始めとする阿部家にとつて容易ならぬ事件であつたことはここに改めて言うまでもない。事件の顛末が阿部一族に対して持つ重い意味を知れば、弥一右衛門の行動への疑問は一層深まるといわなければならぬ。大きな疑問符を打ちたいところである。

しかしながら、弥一右衛門が実際に取つた行動の動機には解答が用意されている。他でもないしばしば挙げられる弥一右衛門の「だが己は己だ。好いわ。武士は妾とは違ふ。主の氣に入らぬから」と云つて、立場が無くなる筈は無い。」という文言がそれである。この独白を非常に重く見るのが従来からの解釈の大勢であることは始めに述べた通りである。しかしこの弥一右衛門の決意が先の大きな疑問符に釣り合うだけの重みを持ち得ていると考えるのは疑問であると思う。この疑問と方向を同じくする少数の論については先に挙げたが、中でも藤本氏の「弥一右衛門が、世間のいいなりになつて死を意ひたのは、俗流の非難を越えるような確固とした理念を持たなかつたからではないだろうか」という推察もできるのである。「という発言には注意をしておきたい。

さて私の疑問は何よりもあの強い決意のすぐ後に弥一右衛門が敢行する追腹の場面から始まる。もしそれが真実強固な決意であつたのなら、「噂」に動かされてあのような死に方はしなかつたのではないかと思うのだ。もと弥一右衛門の決意は周囲の悪意に対して「己は己だ」という自己を貫く姿勢から出た強い決意であつた。しかしこうした形で自己を貫くことの困難を弥一右衛門が十分に承知していたことは先に見てきた通りである。その後弥一右衛門は「怪しからん噂」に憤つて追腹を切る。発言の主を特定できぬ無責任な「噂」に取り巻かれた時、明確な行動の方針を持つ人間は一体どのように行動するものであろうか。そんな時「噂」に突き動かされるといふのは如何にも平常心を失つた人間に相応しい行動で、明確な「信条」を持つ人間のとる行動ではないのではないだろうか。「殉死せずに生き残る」といふ決意が崩れて行くときの脆さを考えると、それが少女の非難や中傷にはびくともしないほどの強固な決意であつたとは考えられないのだ。そして弥一右衛門の追腹は一種の自暴自棄的な気持ちから出たものと見る見方をすべきだとさえ思える。ここでこれを小説の表現に即してみると、あの決意を披露する弥一右衛門の口吻にその精神状態を窺わせる手掛かりが読みとれるのではないかと思う。その手掛かりの一つが「好いわ」という科白である。

作者は弥一右衛門に「好いわ」を独白の要ともいふべき所で使わせている。「要」といふのは、言うまでもなく「百人が百人所詮出来ぬ事と思ふだらう。」として常識を発揮する前半の発言と「武士は妾とは違ふ。主の氣に入らぬから」と云つて、立場が無くなる筈は無い。」として弥一右衛門独自の生き方を打ち出して、自身が持つ常識にさへ従わぬ態度を明らかにする後半の発言との間に挟まれていることを指していふのである。この時弥一右衛門が迫られた選択こそ苦しいものであつたであろうが、後半の発言に従つて弥一右衛門はもつとも困難と知りながら生き残つて従来どおり奉公をするという行動を取つた。それは理性を没却し自己の真つ当な見通しをも犠牲にする精神状態であつたと見なければならぬ。その精神状態にこの「好いわ」といふ一語は相応しているといえるだらう。それまでの理性的な判断を振り払おうとする勢い、追い詰められた者が状況に追られて吐いた言葉にまつわる持鉢な語氣をこの「好いわ」に感じなければならぬ。「好いわ」といふ科白は一阿部一族一に三度現われる。その用例を検討することでこの弥一右衛門の「好いわ」にこのめられた感情をより明らかにすることができるのではないだろうか。第一の用例は今

問題にした。

第二の用例。弥一右衛門が「好いわ」という別の場所、それは言うまでもなく「怪しからん噂」に後から押されるように追腹を決心する時である。

悪口が言ひたくばなんとも云ふが好い。併し此彌一右衛門を壁から見ても横から見ても、命の惜しい男とは、どうして見えようぞ。げに言へば言はれたものかな、好いわ。そんなら此腹の皮を瓢箪に油を塗つて切つて見せう。

この「好いわ」は「怪しからぬ噂」に憤つて追腹を決心をする時に吐き出されている。先の場合と同様この場合も弥一右衛門が冷静であつたとは考えにくい。巖谷川泉氏はこの弥一右衛門を「ここに於いて阿部弥一右衛門は人間の主体的意志の純粹さを歪曲され、主体性を放棄した。彼は冷酷無慈悲な局外者の無責任な監視と批判のデーモンに魅せられたのである。彼も名聞マニア以外の何者でもなかつたことを暴露した。彼は操り人形のように魂を失つて、他律的なものの操りの糸に心魂のからくりをあげ渡した。」と評する。この発言の最終の一行に今は特に注意しておきたい。この時すでに阿部弥一右衛門はあの明察と思慮に事阿部弥一右衛門ではなかつたのである。そしてそういう精神状態にある弥一右衛門に作者が「好いわ」という科白を遺わせていることをよく見ておかなければならない。

第三の用例。物語の後半に登場する竹内数馬も「好いわ。討死するまでの事ぢや。」とこの科白を遺つている。この時の竹内数馬の心理は岩波版第三次鷗外全集で十九行にわたつてかなり詳しく書かれている。その末尾は「一只一刻も早く死にたい。死んで雪がれる汚れではないが、死にたい。犬死でも好いから、死にたい。」と結ばれている。何と激越な調子であろうか。この科白に籠められた竹内数馬の感情は誤解のしようがない。この自暴自棄の感情を導きだすのがあの「好いわ」なのであつた。

弥一右衛門の決心が多分に自暴自棄的な感情に支配されているということが小説本文の表現からも窺えるといえるだろう。それ故弥一右衛門の独白に深い思想的な読みを行なうことは私たちを誤謬に導くものだと云えるのではないだろうか。

#### (四)

阿部弥一右衛門は、第一の選択肢・第二の選択肢を共に採らず第三の選択肢を採つた。そこに明確な主張を認めることは難しいのではないかというのが、これまでの議論で確認した事柄であつた。それではこの第三の選択肢を採つたことの意味は何であろうか。

第一・第二の選択肢と第三のそれとの間には大きな違いがある。それは前二者にはともかくも現状を打ち破ろうとする意思と決断が見られるのに対して、後者にはそのような主体的積極的な意思・決断が見られないという点である。後者の積極的判斷を停止して行動を先送りし、現状に身を任せる受け身と言うべき姿勢も、確かに一つの選択肢であるといえるであろうが、それは選択というにはあまりにも消極的である。「阿部一族」における弥一右衛門のこの態度は現状を進んで解決し問題解決にあたらうとする積極的な姿勢に欠ける優柔不断な態度と評されても仕方があるまい。

この阿部弥一右衛門の態度が作者の創作にかかわることは周知である。これを「阿部茶事談」の文章と並べてみると鷗外の創作の性格は一層明らかである。これを「阿部茶事談」は茶事談の場面での弥一右衛門の決意を「自然のこともあらん折こそ、光尚公の御馬の先づ、年來の御恩をは可奉報」と伝えている。「阿部一族」の場合とは違い、この弥一右衛門は死なぬことに将来に繋がる目的を持っている。ここには前向きの姿勢が読み取れるといえるのではないだろうか。鷗外の創作は「阿部茶事談」とは大いに相違するといわなければならない。

ここに現れた作者創作の意図は(13) 鷗外が歴史小説中に描く人物の基本的な性格と重なるものであり、それは既に問題にされてきた。これはそれ自体興味深い考察の対象ではあるが、本論は阿部弥一右衛門独自部分の消極的な面を明らかにすることを目的とするので、その範囲をこえる問題についてはまた別に機会を得て考えたい。

以上不十分な論であるが、阿部弥一右衛門独自部分の読みについて一つの方向を示すことにはなり得たのではないかと思う。諸賢の御叱正・御教示を頂戴できれば幸せである。

注

- (1) 「阿部一族」本文は「森鷗外集 歴史小説」(和泉書院 昭和六〇・六)所収の「中  
夫公論」初出誌文により、必致に応じて「意地」本文を参考にした。
- (2) 「三好行雄氏 近代文学注釈大系 『森鷗外』」(有精堂) 一一九頁頭注
- (3) 「森鷗外論考」(明治書院) 三四九頁
- (4) 「森鷗外の歴史小説」(筑摩書房) 一〇八頁
- (5) 「近代文学鑑賞講座 4 『森鷗外』」(角川書店) 一五九頁
- (6) 「近代文学試論」五 昭和四三・六
- (7) 「近代文学注釈大系 『森鷗外』」(有精堂) 一一九頁頭注
- (8) 藤本千鶴子氏 「意地について」(『近代文学試論』五 昭和四三・六)
- (9) 藤本千鶴子氏 「歴史上の『阿部一族』事件」(『日本文学』 昭和四八・二)
- (10) 日本思想大系二七「近世武家思想」(岩波書店 昭和四九年十一月) 四五四頁の  
本文による。引用の部分の末に「寛永以後此案ナシ。」とある。
- (11) 「二、三男については、まことに無視された存在であった。家の相続ということ  
から、一生日陰者として、飼い殺しの身分で生涯を終えるよりほかはなかつた。  
新しく一家を創立するか、他家に養子にゆけば、家を出ることができた。」(『別  
冊歴史読本 江戸時代考証総覧』八九頁、一九九四年十一月十七日新人物往来社  
発行)
- (12) 「森鷗外論考」 三五〇頁
- (13) 藤本千鶴子氏 校本「阿部茶亭談」(『近世・近代のことばと文学 真下三郎先  
生退官記念論文集』所収)による。
- 清田文武氏 「鷗外の歴史小説における人間像の形成 — 『待つ』 『耐える』  
という契機を中心に —」(『日本文学研究資料叢書 森鷗外Ⅱ』所収)